

覚悟をもって犬をしつけることと「正の罰」を用いること

どうぶつの総合病院 行動診療科 獣医師
北里大学 獣医学部 客員教授
日本ヒルズ・コルゲート株式会社
入交眞巳 (獣医師 博士 米国獣医行動学専門医)

飼い主を攻撃して手が付けられなくなった犬の訓練の方法に関して「覚悟をもって行う訓練」とたたくなどの「正の罰」を用いる方法の一般への放送に関する意見

今回の NHK の「プロフェッショナル 仕事の流儀」において拝見しました訓練の方法に関して

犬の問題行動を治し、1匹でも愛する家族のもとに返して命を全うさせるという信念とその覚悟、そして犬への愛情を感じる訓練士であり、多くの視聴者に共感をもたらせた番組で、多くの共感と称賛が御番組制作に届いていることと存じます。訓練士の方は素晴らしい人間性をお持ちの方なのだと思います。しかし、方法論に関して専門家からの意見を述べさせていただきます。

飼い主に対して犬が激しく攻撃している場合、問題を起こしている場合、なぜその行動が起きているか考えないとなりません。犬は人の子どものような存在なのであれば、人の子どものように「なぜかみ付くのか」を考えます。多くの場合、犬が飼い主をかみ付くのは不安や恐怖があって追い詰められたときにおこります。かみつくことで「怖いことをする人」が距離をとってくれたりするからです。学習もしていきますので、ちょっとでも人に対して不信感があれば自分を守るため先制攻撃でかみつこうとします。また、てんかん発作や内分泌疾患、腫瘍性疾患（特に脳や神経の）などの病気から攻撃性が起こります。その意味では人と同じです。

また、犬は長い年月をかけて人と共に暮らすようになり、人の気持ちを察したり、人の行動を読む能力が備わってきました(Kirchhoferら2012, Miklosiら2007, Viranyiら2008)。犬は人を見てコミュニケーションをとろうとしていますし、自分の体を使って人とコミュニケーションをとろうとしている動物です。

だからこそ、もし激しく家族を攻撃している犬であれば、何らかの理由があり、コミュニケーションが取れていないことがわかりますから、飼い主と犬のコミュニケーションのどこが破綻したのか、そこをまずは見て正していかないと、理由を考えてあげずに表面に出てきている攻撃性だけ痛みを与えて止めてもそれは犬にとってストレスの原因となります。

今回放映された「まめ蔵」ちゃんがたたかれながら「更生」していく様子はどう理解できるかという、訓練士は一貫性のある行動を犬に対してとっていたからにすぎず、犬が中村氏の言うことを理解しやすかったからです。プロフェッショナルな方なので、自然に、犬にわかりやすい態度になっているのでしょう。おそらく画像に出たようにたたかなくても、ケージの中で押さえつけなくても一貫性のある態度で接することで同じ結果は得られたと思います。

人や犬を含むすべての動物種において行動を制止するためにオペラント条件付けの「罰」を使用することはありますが、罰には「負の罰」と「正の罰」の2種類あり、痛みや不快感を与えて行動を制止する「正の罰」に関してはそれを有効に働かすためにはルールがあります。人の言葉を理解しない動物や人の赤ちゃんに対して「正の罰」を用いて行動を制止する場合のルールは、行動を起こすたびに毎回、その行動の直後に、適切な強さで痛みを与えなければならないものであり、人がたたいたりすることでその「罰」を与えることはロボット的な正確な人でない限りは不可能であるため、人が手を下す「正の罰」は動物や人の赤ちゃんに対して使用するの難しいことが心理学、行動学の分野から理解されています。

学習の理論とオペラント条件付けを提唱したスキナーでさえ、「罰」を与え続ける訓練で動物の行動を制止し続けることは不可能である、と記載しています。

さらに、今回のテレビでお示しいただいた攻撃性のある犬たちの言葉（犬のボディーランゲージ）を拝見していますと不安、葛藤、恐怖からの攻撃行動でした。不安な気持ちから出ている行動に対して「正の罰」で行動を抑制するのは、理論的にも無理がある方法です。例えば「お化け屋敷で怖いから泣いている2歳の子ども」に対して母親が、「泣く」行動を抑制するために竹刀で大きな音をさせて驚かせて黙らせ、お化け屋敷の中で少しでもベソをかくと「泣くな！」と言いながら壁に押しさえつけている状態になります。子供は母親の怒りを止めるために何をしたらいいのか必死で考えて行動をする状態です。「お化け屋敷は実際怖くないので泣かないでもよい」、という学習ではなく、心は恐怖でも母親がいるときは母親の暴力から自分の身を守るため泣く行動をとらない、と学習し、母親が近くにいた際はとりあえず動かなくなればよい、と学習していきます。完全な恐怖による支配となります。訓練士に甘えていた行動は、体罰のない状況であれば安心なので、甘えますが、状況が変わると身を守る行動が出るだけです。ドメスティックバイオレンスの母親に対し、怖い状況にならなければ母親に甘えるけれど、一度母親の様子を見て「まずい」状態になったら身を守る子どもと同じになります。

攻撃性に対しての体罰は「なぜたたかれたのか」理解させるのは上記のようにこの方法では難しいことをご理解いただきたいと思います。科学的に難しい方法であるにもかかわらず

ず、犬をたたき続けている場合は、科学的に効果も根拠もないと分かっているのに精神的肉体的苦痛や痛みを与え続けているに他ならないため、これは「虐待」と視聴者から訴えられても仕方のないことと考えます。

さらに、犬の性格の性格や行動に関しては 1999 年に Niimi らが遺伝子を調べてドーパミン受容体の遺伝子構成から新規探査傾向が柴犬とゴールデンレトリバーでは違いがある可能性があることを示唆している論文はあります。論文によると日本犬は怖がりで変化をあまり好まないかもしれないけれど、リスクテーカー（怖いのに近づいて行ってしまう）である可能性が高いと示唆しており、日本犬は不安傾向が強くて怖がりなため、日本犬を抑えつけたようなしつけをすると、恐怖により訓練士に対しては行動が抑制されますが、飼い主のもとに帰ってしばらくした時に、飼い主がなぜ犬が攻撃的になったのか犬の行動を理解していない場合は再度激しい攻撃性が飼い主に対して出てしまう可能性があります。

犬を始めどんな動物も罰の与え方によっては「学習性の無気力」に陥り、何も抵抗をしなくなるという人で言う「うつ」のような状態になります。これはなにかの拍子に今度は動物が「爆発」する可能性があり、人で言う「切れた」「パニック」の状態になり、今以上の激しい口傷事故や一般市民への被害を出しかねない危険性も秘めています。一般視聴者がわからずに真似をしてけがをしてしまう可能性を危惧します。

最後に激しい攻撃行動を見せる日本犬をはじめとする犬たちを獣医師として診察、拝見しており、治療をしています。彼らの多くは脳内のセロトニンの枯渇が原因であることが多いと考えます。これは 1996 年の Reisner らの報告にもありますが、「激怒症候群」と当時呼ばれていた激しく攻撃する犬の脳脊髄液を調べたところセロトニンとドーパミンという脳内ホルモンのバランスが崩れていることが判明し、これは遺伝的な問題があったり、ストレスが関連するものであり、セロトニンを増やす薬（抗うつ剤）を投与することでコントロールできるようになります。犬の攻撃性は不安からくるものであることがほとんどで、たたかれることで不安はさらに大きくなるし、不安や攻撃性を下げるセロトニンが人からの暴力によりさらに枯渇していきますので、攻撃性は強くなります。訓練所では表面的に攻撃性が抑制されていたとしても返還後に非常に危険な状態になる可能性もあります。

一部にはてんかん発作として攻撃性が出ている犬もあります。特に若い犬はそのような個体が多くあります。病気の可能性を示唆しないで誰でも訓練で治ることを伝えている放映内容にも不安が残ります。

NHK の情報力は絶大であり、影響力は大きいです。だからこそ、十分にリサーチいただいて内容を吟味いただいて放映していただけたらと思います。

最後になりますが、私も激しく飼い主を攻撃するために手放すしかなくなってしまった犬を飼育しています。私と主人はかまれていませんし、この犬をたたいたり殴ったりしたことはありません。でも学習の理論を用いて治療しており、現在は抱っこも散歩もルールがあればできるようになっています。ほかの方法でも真剣に問題と向き合っているトレーナーもたくさんいらっしゃることをご理解いただきたいです。